

Title	絶対時制と相対時制
Author	衣笠, 忠司
Citation	人文研究. 44 卷 6 号, p.351-369.
Issue Date	1992
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

絶対時制と相対時制

衣 笠 忠 司

1 Declerck (1991b)

相対時制という考えは以前からあったが、その有効性を本当の意味で実証してみせてくれたのが、Declerck (1991b), *Tense in English*. である。そこで第1章ではその考えを紹介し、第2章では私見を述べてみたい。

1. 1 8つの時制

英語には現在と過去の2つの時制があるとする立場があるが、これは形態の違いだけを問題にしているからである。しかし、フランス語では未来が形態的に区別されるのに現在と非現在でなく過去と非過去と2つに区別されることからしても、それは時をそういうふうには扱っているというだけのことである。フランス語の未来形は助動詞から接尾辞に変化したものであることを考えても、助動詞を加えず接尾辞のみの区別である2つの時制は認めがたい。

また、現在完了や未来はしばしば時制からはずされてアスペクトと法性を表すとされる。しかし、(1) 未来時制は法助動詞の意味合いを持つということであり、(2) 印欧語の未来時制は法助動詞から発達し、未来についてのことがらを言うのに使われていたのはまれではあるが、だからといって英語に未来時制がないといえない。さらに、フランス語では未来時制は英語と同じく法助動詞だが、屈折辞をもつので未来時制があることについてはあまり異論はないということがある。

未来時制の1つである条件法の時制(過去における未来)は非事実的法性の意味合いをもたない。これは単に現時点からみた過去の時の状況にすぎな

いからである。

(1) a. Fifteen years later Bill *would be* the richest man in town.

b. Berlin *would not fall* before 1945.

他にも言語的証拠から、現代英語の未来は時制であり、2次的に法助動詞の用法があるとする論も存在する。

現在完了についても同じで、完了相は認められるが時制ではないとする意見がある。しかし現在完了-完了=現在時制ではなく、現在完了も独自の時制であるところでは考える。

shall/will による未来は現在形や現在進行形や be going to でも未来を示せるので時制ではないといわれることがあるが、フランス語では未来時制だけでなく現在時制とか aller を使っても未来を示せるのに未来時制があるとされている。また、現在時制や be going to を使って未来を示せる動詞はそう多くない。shall/will はそれだけで未来を示せる。shall/will だけが完了形と組み合わせられて未来完了を示せるし、shall/will は進行形と組み合わせられて未来進行時制を作れるのである。よって shall/will は未来時を示す無標の手段であるといえることから未来時制である。

こうした理由で過去と現在（非過去）や助動詞の違いを含めるとすると、現在・過去・未来・現在完了・過去完了・未来完了・条件法の時制・条件法の完了などが入ってくる。つまり、時制を2つや3つでなく8つあるとする。

1. 2 事態 TO と4つの時区分

まず、(2) の文をみてみよう。

(2) John was in the kitchen this afternoon.

こうした節内で表されている出来事を Comrie (1985) などにならい situation [ここでは事態と訳す] とよび、発語時点をゼロ時点とする。もしそれがだめなら受話時点をゼロ時点とする。事態 TO (time of orientation) は事態が実際に行われた時をさすといえる。過去時制の使用は事態 TO がゼロ時点より前であることを示す。(3) では最初の節の TO より後の節の TO がより前の TO であることになる。

(3) John remained in the kitchen after he had finished his dinner.

事態が現在か過去の時間領域にあるときは、事態 TO は時間領域を3つの sector [時区と訳す] に分ける：(a) TO より前を示す前方時区、(b) TO に

始まり未来にのびる後方時区、(c) TO を中心とする同時区。(4) の文では said の事態 TO に対して was が (c) で、had worked は (a)、would go は (b) にあたることになる。

(4) John *said* he *was* tired because he *had worked* hard and that he *would go to sleep early*.

ゼロ時点は現在にあるので現在の時間領域は自動的に3つの時区 (pre-present [現在完了時と訳す]、present [現在時と訳す]、post-present [未来時と訳す]) に分割できる。これに対して、過去の時間領域はゼロ時点より完全に前にある1つの時区しかない。その4つの時区が絶対時区となる。これを英語では過去、現在完了、現在、未来時制の4つを用いる。そのそれぞれに1つの絶対時制ということで「絶対時制」は4つとなる。そして残りの4つは事態とすでに時区内で確立された TO とを関連づけることのみ行う時制で「相対時制」である。

絶対時区は客観的な時では定義できず、話し手がどう時間を意識しているかによる。例えば現在時区は (5a) の文のように点のこともあるし、(5b) のように無限の広がりをもつこともある。

(5) a. I declare the meeting closed.

b. London lies on the Thames.

同様に現在完了時区は非常に短い時もあるし、はるか昔にさかのぼることある。過去時区もまた遠い昔のこともあるし、ついさっきということもある。よって、同じ事態が (6a) のように現在完了時区で表現されたり、(6b) のように過去時区で表現されることがある。

(6) a. I have just met Ann.

b. I met Ann just now.

1. 3 時間領域 (temporal domain)

それぞれの時区に対応して時間領域がある。(7)では過去時領域であり、4つの事態がその領域内にかかっているといえる。

(7) John *said* he *was* tired because he *had worked* hard and that he *would go to sleep*. (= (4))

そして、(7) では said の事態 TO は was tired と would go to sleep という事態の束縛 TO であり、was tired の事態 TO は had worked hard の束縛 TO であるといえる。また、ある領域の中心 TO は時間領域を確立し、その領

域に導かれる次の事態の束縛 TO となる事態 TO である。(7) の中心 TO は *said* の事態 TO であり、*was tired* や *would go to sleep* の事態 TO は同時性や後方性という形でこの TO と関連し、それに従った適切な時制が選択される。また、時間的に従属する事態 TO を付随 TO という。

(8a) では3つの事態 TO はお互いに同時性をもつ。すなわち、過去形の *noticed* は過去時領域の中心 TO となる絶対時制である。残る2つの過去形は事態がこの中心 TO と同時性をもつことを示す相対時制である。ゆえに3つの事態は同じ時間領域にあるといえる。

(8) a. *I noticed that Bill was talking with Emma and that they seemed excited about something.*

b. *Suddenly the bell rang. Bill stood up from his chair, went to the front door and opened it.*

これに対し(8b)では事態は順に起こっていて、時制はそれぞれ前方性、後方性ということで関連していない。よってすべてがそれぞれ絶対時制であり別々の過去時領域にある事態である。そこでこのような現象を時間領域の転換 (shift) とよぶ。

また中心 TO の前に付随 TO がくる場合もある。(9) の場合では1つ目の事態 TO は中心 TO でなく付随 TO であることに注意したい。

(9) *John had been in Venice before. He went there when he was only fourteen.*

(10a) では過去時領域から現在完了時領域へ、そして未来時領域への転換である。(10b) では過去時領域から現在時領域への転換である。ただ、(10b) で *is* への転換は随意的である。

(10) a. *I saw him yesterday, I have seen him today, and I will see him again tomorrow.*

b. *He said that Betty is/was a very clever girl.*

一旦ある時間領域が確立されると、他の事態 TO がそこに導かれることになる。この場合新しく導かれた事態 TO はすでに時間領域内にある TO の1つと関連する。これを「時の従属」とよぶ。これは統語的従属とは同じでない。例えば (a) 従属節は時の従属は示しても示さなくてもよい [He said he would/will come.] (b) 従属時制 [相対時制] は時々うめこみ節でなくても起こる [He had worked all day. が冒頭にくることがある] (c) *The boy who told me the news had witnessed the accident.* では従属節は絶対時制

を用いており、主節が従属時制を用いている。

1. 4 過去時領域

過去時領域で同時性を示すためには、束縛 TO が中心 TO か付随 TO かにかかわらず (11) のように単純過去形を使い、前方性を示すには (12) のように過去完了形を使い、後方性を示すには (13) のように条件法がある。

(11) He said that he *was feeling* hungry.

(12) He thought I *had been* living there for some time.

(13) I thought he *would help* me.

次の(14)では時の関係は話者がどうとらえるかで、had にも had died ともなる。had died では相対時制になるが、died は新しい時間領域を確立する絶対過去時制になる。

(14) I *spoke* to the boy whose father *died/had died* a week earlier.

また、条件法 [would + 原形] のみが過去時領域における後方性を表す唯一の手段でないのはもちろんである。

(15) He said there *was going to* be a storm in a minute.

1. 5 現在完了時領域

現在完了を不定完了と継続完了の 2 種類に分けるのが特色である。不定完了は必ず中心 TO となり、この中心 TO と関連づける場合時の視点の転換を伴うことになるので過去時領域となりやすい特徴がある。

(16) a. I have eaten lobster once, but I can't say I *enjoyed* it.

b. I have never promised that I *would help* you.

もう 1 つの継続完了であれば時の視点は現在時領域内のままである特徴がある。

(17) I have been digging the garden, while you *have been doing* nothing.

但し、不定完了はくりかえしの事態の場合、同時性を示すことが意識されると過去時制などでなく (18b) のように現在完了が用いられる。

(18) a. I have often cried when I *was feeling* lonely.

b. I have often cried when I *have felt* lonely.

あるいは話し手は従属節の事態を現在完了時制の束縛 TO と関連づける (16) のような時の視点を変えるという時の従属の過程をせず、ゼロ時点と

何らかの関係をもたせようとする、新たにゼロ時点に関連する独自の絶対現在完了時制となることがある。

(19) The doctor has already confirmed that Bill *has sprained* his ankle.
他の絶対時制への転換も見られる。

(20) The doctor has already confirmed that Bill *will be* unable to walk to school for some time because he *has sprained* his ankle.

また、継続完了では常にゼロ時点を含むので従属節には絶対時制がくる。

(21) a. I have known for some time that Jim *has sprained* his ankle.

b. I have known for some time that he *did* not do it.

従属節が現在完了と現在形ではどちらもゼロ時点を含むことになり当然同時性があるとのみ解釈される。過去から続いているという含みがあれば現在完了、それがなければ現在形が自然である。

(22) a. Ever since this morning I have been working while you *have been doing* nothing.

b. Jim has known for some time that Joy *has been/is* in Reno.

時には現在形のみが可能ということがある。これはそうしないと現在完了が継続完了でなく不定完了の意味をもってしまうからである。

(23) I have felt for weeks that you *want* me.

もし完了がくりかえしの意味をもつなら現在と過去の2つが可能で、worksでは継続完了、workedでは不定完了と解釈される。

(24) He has always told me that he *works/worked* in a bank.

ある領域の中心 TO を確立する継続完了はこの TO をゼロ時点を含むものとするので、中心 TO に後方的な事態はゼロ時点より後方的ということになる。そこで未来時制を使うことになる。

(25) Ever since this morning he has repeated that he *will* move to London.

しかしくりかえしの意味の不定完了であればゼロ時点を含まない、過去の TO に対して後方的な条件法の時制（もしくは was going to + 原形など）に転換されるが、(27) のように純粋な継続完了であれば、ゼロ時点を含むことから that 節は絶対未来時制の1つになる。

(26) He has been telling me for months that he *was going to invite* me, but he has not done it yet.

(27) He has been telling me for months that he *is going to invite* me.

1. 6 現在時制

現在時制はゼロ時点を示す中心 TO もしくはゼロ時点を含む他の TO と同時性のある事態を示す。

- (28) a. I am working, while he *is doing* nothing.
 b. I am just saying to the others that *I think* John *does not mean* what he *is saying*.

ゼロ時点をさすか含む現在時領域では定形動詞を使って前方性や後方性の事態を示すとすると、その事態は他の絶対時領域にあることになる。ゼロを含む TO に前方的なものは話し手の気持次第で過去時制か現在完了時制になる。

- (29) a. I am just explaining that I *did* it last night.
 b. I am just explaining that I *have not been* able to do it last night.

これらの that 節は新しい時間領域を作る絶対時制である。よってこの that 節の事態 TO は他の事態 TO の束縛 TO ともなる。(30) の下線部は that 節の事態 TO に対して時の従属をせず絶対時制になっており、(31) では時の従属になっている。

- (30) I am just explaining that I have not been able to do it because I have been feeling ill.
 (31) I am just explaining that I have not been able to do it because I was feeling ill (when I had to do it).

1. 7 未来時制

ゼロ時点を含む TO に後方的な事態を示すには未来時制もしくは類似表現を使う。

- (32) a. I know John *will be* in London tomorrow.
 b. Why don't you admit you *are leaving* the country?
 c. I think it's *going to rain*.

事態 TO をゼロ時点でなく未来時領域の TO と関連づけようとすれば時の視点の転換がおこる。そして、未来時領域の TO が束縛 TO である時、それはまるでゼロ時点のものであるかのようにふるまい、ゼロ時点を中心とする 4 つの絶対時制の場合と同じくその TO を中心に 4 つの絶対時制をとる。

本来ゼロ時点を基準にそれより前の事態というのは過去時領域か現在完了時領域にあることになるが、この未来時領域の TO を中心とする場合も同じ

ようになる。過去時領域に時の視点が転換する場合、被束縛事態（下線部）は束縛 TO より完全に以前にあり、TO に達してしまうことは許されない。

- (33) a. The police will believe that he *was killed* yesterday.
b. The police will find out that you *were staying* here today, and not in London.
c. (said while planning someone's murder) The police will believe that he *was killed* tonight.

(33a) ではゼロ時点より前方性があり、(33b) では同時性があり、(33c) では後方性があるのに一様に過去時制になっている。つまり、ゼロ時点を基準にした時制というのはここでは関係せず、にせのゼロ時点と関係している。過去時制もにせの過去時制であり、それが前方性を示している。このにせの過去時制はそこに導かれた他の事態の束縛 TO にもなる。その場合被束縛 TO が過去だと同時性を、過去完了だと前方性を示すことになる。

- (34) (said while planning someone's murder) The police will think that he was killed when he *came* home after he *had attended* the meeting at his club.

同じ様に、ある事態が未来時領域の中心 TO に至る時の広がりの中にある場合、まるで現在完了時領域にあるように扱われ、現在完了時制が使われる。

- (35) He will soon find out that you *have been following* him.
もしそれが不定完了であれば、すでに議論したようにその従属節には過去時領域に属するようになるのがくる。

- (36) He will wonder if she has ever said that she *was* unhappy.
もしそれが未来時の中心 TO まで続く事態を表す場合には絶対継続完了で、ゼロ時点を中心とする絶対継続完了と似た様態を示し、(37) では同時性を、(38) では前方性を、(39) では後方性を示すものが後続する例である。

- (37) She will whisper to you that she has felt for a long time that you *want* her.

- (38) Tomorrow the police will tell him that they have known for some time that he *killed* his wife.

- (39) He will tell you that he has been hoping that you *will help* him.

未来時の束縛 TO と同時性のある事態はまるで現在時領域にあるかのように表される。よって、現在形が用いられる。

- (40) They will believe that Jack *is* back in town.

ただこのような文はもちろんあいまい性があって、補文の現在時制は'にせの'ゼロ時点を中心とする'にせの'現在時制でなくゼロ時点を中心とする現在時制への転換ともとれる。こうした同時性を示す'にせの'現在形は従属節に限られ、埋め込まれていない文や非制限的關係節では独自の未来時制になる。(41a)では従属節で同時性を示す現在形を用いられているのに対し、ほぼ同じ意味の(41b)では主節のくりかえしであるためもう一度同じ未来時制が使われているのが参考になる。

- (41) a. You will be met by a man who *is* wearing a red tie.
 b. You will be met by a man. He *will be* wearing a red tie.
 c. They will find out that Jack thinks that he *was* born in London.
- また、未来時 TO に後方的な事態を表すにはもう一度未来時制を使って未来時領域にあるかのように表わされる。

(42) He will say that he *will* never leave her.

次の(43a)(43b)は5時に出発したのか、5時より前に出発しているのかあいまいな文である。

- (43) a. John had left at five o'clock.
 b. John will have left at five o'clock.
 c. John had left when Bill arrived.

(43c)があいまいなのは2つの節の事態は同じ過去時領域にあり、過去完了の had left はジョンの出発がなんらかの TO より前方的であることを示している。過去時制は過去時領域にあるどの TO とも同時性をもつものと解釈されるので、ビルの到着がジョンの出発と同時なのか、ジョンの出発が前方的としているなんらかの TO と同時なのかあいまいということになる。

これに対して、未来時領域ではあいまい性がない。つまり中心 TO との同時性を示すには現在形が用いられ、(44a)がそうである。中心 TO に前方的な事態と同時性を示すには過去時制が使われ、それが(44b)である。

- (44) a. John will have left when Bill arrives.
 b. (John will no longer be there at midnight.) He will have left when Bill arrived.

1.8 ゆるい同時性

その節の時制が事態を束縛 TO と同時性があることを示したとしても、両者がまったく同時に起こることは必ずしも意味しない。2つの事態が同時性

があるという時、それは起こっている時間が一致する場合と時間が重なるところがある場合とがある。

(45) a. He felt unhappy when he *said* that.

b. We will be in London when he *arrives*.

しかし、次の文では同時性は厳密なものでなくゆるい (sloppy) 同時性であるといえる。

(46) a. When John *came* home, Mary told him about the accident.

b. (Be careful in your speech tonight.) The newspapers will print everything you *say*.

こうした例では重なり合わない連続する2つの事態をさしている。しかし、従属節で使われている時制は同時性を示すのに使われるもので、前方性は(47)のように示される。

(47) a. When John *had come* home, Mary told him about the accident.

b. The newspapers will print everything that you *have said*.

c. When the bell *has rung*, everybody goes home.

厳密に同時でなくゆるい場合のほうが同時性を示す時制が使われるように思えるが、そうではない。同時性を示す時制を使っているということは両者が同じ occasion に属していると扱っていることを示す。これはその基本的意味が同時性の表現である現在分詞の例でもわかる。

(48) a. Opening the drawer he took out a revolver.

b. Raising the trapdoor she pointed to a flight of steps.

現在分詞がゆるい同時性として使われていることは、同時性というのは現在分詞によって表されているもののうちの無標の意味であることがわかる。このことは条件節の文で明らかで、2つの節の間の時の関係の表現は if p then q という論理的つながりほど重要でない。よって条件節では if 節はほとんど前方性についていう必要はなく、次の例は例外的場合である。

(49) You will not get a full pension if you haven't worked for forty years.

たいていの if 節は同時性を示す動詞形をとるわけで、次の文のように2つの節に違う副詞があっても同時性があると考えられる。

(50) If John doesn't do it today, I will do it myself tomorrow.

つまり両者は未来時事態にあって、互いにつながっているととらえる。順次性に焦点がおかれる場合のみ次のような表現になる。

(51) .If John hasn't done it today, I will do it myself tomorrow.

これは (52) のような when 節でも同じである。そして両者の順番が同時か前後かについては認識の問題で、ゆるい同時性を示している。

(52) a. When he lived at Abbotsford, Scott always dined at home.

b. When Jocelyn received the letter, she wrote a reply.

ところで、副詞節で未来時領域にあることを示すのに現在時制が使われることがあるが、この場合はゆるい同時性ではない。ゆるい同時性の場合に使われる現在分詞をこの場合は使えないし、前方性や後方性のある動詞形は使えないことから違いがある。

(53) a. John will leave before Mary arrives. (* will arrive)

b. I will stay here until she comes back. (* will come)

c. Bill intended to wait until the shop opened. (* would open)

d. It would not be long now before the shop opened. (* would open)

こうした場合の時制の扱いについては変則的なものとして普通扱われている。つまり、ドイツ語やオランダ語では実際 (53) でアステリスクで非文としているような副詞節に未来時制や条件法の時制がくることを許すことから、この副詞節は主節より後方的であるのが論理的といわれる。しかし、when/after/before などは at/after/before the time when/that の前置詞句的意味に等しいことを考えると、同時性を示す動詞形の使用はそう非論理的でもない。after や before のような接続詞は実際は古英語のそうしたたぐいの前置詞句から発達してきたことを示す通時的証拠がある。(53a) で will arrive でなく arrives というのは副詞節が接続詞の意味構造からくる未来時 TO と同時性があるからである。この同時性は before the time at which の at によって合図され、この場合はゆるい同時性でなく正真正銘の同時性がある。つまり時を示す接続詞が暗に示唆する implicit TO と同時性がある。ゆるい同時性があるのは hope や bet の後にくる補文である。

(54) I hope/bet I (will) get there before the others.

しかしその他の似た動詞には見られない。

(55) * I expect/am sure/supposed/am afraid I get there before the others.

同時性は3つの時を示すもののなかで無標であることは不定詞や動名詞節でも明らかである。これらの節は時制がないので時間領域を作ることがで

きないので、同一の時間領域内の関係を示す。そして前方性を表すには完了形を、同時性を表すには現在形を、後方性を表すには *be going to* の形を使うことになる。

- (56) a. John seems to *be* ill.
b. John seems to *have been* ill.
c. John seems to *be going to be* ill.

しかし前方性や後方性がある場合でも、文脈などで明らかであればや現在形が使われる。つまり、厳密には同時性がなくても同時性を表す動詞形が使われることが明らかである。

- (57) a. He admits *being/having been* there yesterday.
b. I expect to *see* him tomorrow.

1.9 絶対時制

新しい事態が導かれる場合、それをすでにある時間領域に関係づけようとする、相対時制が用いられることになるが、再び独自にゼロ時点と関係づけようとする、絶対時制を用いることになる。この場合、a) 時間領域を転換すること。b) 同時性を示す時間領域を作ること。c) 時間領域を再確立すること。の3つの方法がある。これは *when* や *while* で導かれる時を示す節や条件節では可能ではない。しかし、主節や主節との関連の弱い関係節や理由を示す従属節では可能である。そうした節では事態 TO は直接ゼロ時点と関連することがある。ここでは (58) のような時区の変換に伴う時間領域の変換ではなく、同じ時区内の時間領域の変換について話している。その例が (59a)(60a) であり、(59b)(60b) では時間領域の変換は行われていない点で違っている。

- (58) He *says* that he *was* ill.
(59) a. The man left the town and *was* never *heard* of again.
b. The man left the town and *would* never *be* heard of again.
(60) a. John *said* that Mary *witnessed* the accident.
b. John *said* that Mary *had* *witnessed* the accident.

(59a)(60a) では時制の単純化によると説明されることもあるだろうが、2つの事態に順序がからんでいるというよりも、ゼロ時点に関してどう位置しているかということで変換が起きている次のような例もある。

- (61) The news agency has spread the news that the astronauts *have*

landed.

(62) After the party I will tell you all about the people we *will meet* there.

こうした例でももちろん前後関係はわかるが、それは時制によってではなく認識からくるものである。

そこで、時間領域の転換が時の前後関係をあいまいにしないとわかる場合には話し手はこの時間領域の転換を行うのである。よって、(63) では after があるのでどちらでもよいが、(64) では過去と過去完了では意味が違う。

(63) I always felt hungry after I *worked/had worked* in the garden.

(64) I always felt hungry when I *worked/had worked* in the garden.

しかしいては理解をあやまることはないので転換がおこる。(59a)

(60a) や (65a) がそうであるが、(65b) ではそうでない。

(65) a. I will never forget that you are treating me like this.

b. I will never forget that you have treated me like this.

c. Next time I will tell your father that you are not at school.

(65a) は未来時から現在時への時間領域の転換であり、(65b) はほぼ同じ意味だが、ゼロ時点は主節の未来時 TO からすれば前方的であるということから現在完了時制が使われている。(65c) は時間領域の転換でなく、同時性を示す相対時制である。この違いは前方性を示す forget やゼロ時点を示す傾向のある like this と、ゼロ時点より後方性を示す next time に関係する。すでに見たように現在完了時領域からは過去時領域への転換があるし、未来時領域からも同じように時間領域の転換がある。

(66) a. I have never been drunk while I *was* on duty.

b. I have never been drunk after I *had drunk* five glasses.

(67) a. He will say that he *was* ill after he *had drunk* ten glasses tonight.

b. He will say that he *has* never *seen* me before.

よって、(68) の文では同時性の現在形かゼロ時の現在形かあいまい性があるが、(69) のような場合は未来時の意味のみとなる。

(68) You will be met by a man who *is wearing* a dark coat.

(69) The newspapers will publish everything that *will be said*.

うめこみ文が先行する場合は、現在形は現在のことを示すので、(70b) のようにする。

- (70) a. What *is going on* will surprise your father.
b. What *will be going on* will surprise your father.
- (71) は新しい時間領域ができるというより同時時間領域ができる例。これには Future Perspective System に属する絶対時制が使われる。これに対し、相対時制は Present Perspective System がかわる。
- (71) The whole family will assemble here next year. Even John and Susan *will come*. They *will have been married* then for forty years.
- (72) は時間領域の転換の例で、(73) は同時時間領域の例で少し違いがあることに注意。
- (72) a. He got up from his bed and *opened* the door.
b. He has visited Greece, and he *has been* in Italy too.
- (73) a. He lay on his bed and *smoked* a cigarette.
b. Someone has used my typewriter and *has torn* the ribbon while doing so.

他の未来表現に 'will be going(about) to do' があるが、Future Perspective System に属し絶対相対時制(未来)の例で、時間領域の転換でなく、その再確立の例と考えられる。

- (74) Call on me at lunchtime on Monday - I'll be going to speak to the boss about it that afternoon.

つまり、1) 非うめこみ節では Future Perspective System である。2) まれな例外を除き主節の時に従属する従属節では Present Perspective System になる。3) 主節の時に従属しない場合は Future Present System が使われる[非制限的用法]。4) 制限的な場合はどちらでもよい。といったことがいえる。

2. 時制再考

Declerck の相対時制と絶対時制の考え方は独特のものでかなり興味ある点があるといえるがここではそれにまつわる問題を再考してみたい。そのためにもまず過去完了時制と未来時制について考え、次に相対時制と順次性についてみていきたい。

2. 1 過去完了時制と未来時制

彼は時制としては形態的に区別される過去と非過去との区別は否定している。しかし、実際のところ、彼の時制も形態的なものを重視しているといわざるをえない。彼の絶対時制というのはいわばゼロ時点を中心とする第1次時制といえるものであるが、形態的なことを重視しているといえる。

- (75) a. 現在時制 = ゼロ時点 + ϕ
 b. 現在完了時制 = ゼロ時点 + have + p.p.
 c. 未来時制 = ゼロ時点 + will/shall
 d. 過去時制 = ゼロ時点 + ed

この第1次時制を含む文はそれだけで文として自立できる特徴がある。例えば現在完了時制を含む(76a)はゼロ時点が焦点であるのでそれだけでよいが、過去完了時制を含む節はそれだけでは不自然で、(3)のように第1次時制で焦点をあわせるか、暗黙の形でも過去時領域であることがわかっている必要がある。

- (76) a. John *has been* to Venice once.
 b. John *had been* to Venice before.

(3) John remained in the kitchen after he *had finished* his dinner.

つまり他の時制に依存して成り立つ時制が第2次時制つまり相対時制である。また、絶対時制であっても他の時制に束縛されると相対時制として機能することに注意が必要である。

ただ、Declerck は現在完了を絶対時制としておきながら過去完了を相対時制としているのは第1次時制と第2次時制という点から考えると納得できないことではないが、例えば(76b)や(77)における過去完了は過去の過去の例でなく、過去における完了の意味である。こうした場合と現在時における現在完了とは完了のもつ意味に違いはない。こうした have + p.p. 部分の意味の重なりをどう説明していくのだろうか。

- (77) Aram had a gun and even without it the enormous guard could have killed him easily. He was almost twice as big as Samuel and much more powerful. They *had reached* the other side of the bridge now, and the barracks lay just ahead of them. — Sheldon, *Bloodline*

また、ある時点における時のひろがりを示しかつその形態を独自にもつ進行形はアスペクトとみなし、同じく(2時点間ではあるが)時の広がりをもつ完

了形を時制としてしまうのは、両者間にある共通部分を無視している印象は否めない。

次に未来時制は絶対時制であるとするところから問題を考えてみよう。(78) が示すように同時性を示す場合には現在形になるのは自然でないが、これはにせのゼロ時点を中心 TO としているからとし、未来時制については絶対時制と相対時制などを別の形で説明し直している。今、この will/shall を法助動詞の（あるいは相対時制の）一種として位置づけ、現在時領域に含めるものとする、この文の時間領域は現在時制ということになる。すると、にせのゼロ時点を考えなくてもよくなり、(78) で同時性の表現として現在時制を使うことに不自然さはなくなる。

(78) She'll probably be on the same plane as I *am* tomorrow. - Swan
さらに、未来時制には現在時制とまったく同じように前方性を示すのに現在完了や過去形、同時性を示すのに現在形、後方性を示すのに未来形が後続するのに、(79b) (79c) のような例がダイクシスの理論では十分に扱えるか疑問が残ることからも、未来時制については相対時制部分は残すべきといえる。

- (79) a. On Friday, Oswald will say, 'I arrived on Thursday.'
b. On Friday, Oswald will say that he arrived on Thursday.
c. ?On Friday, Oswald will say that he arrived tomorrow.

こうしたことから、未来時制と現在完了時制は現在時領域に位置しているので自立性はあることはあるが、相対時制的機能が中心である絶対相対時制という形で扱うべきであろう。そして絶対時制としては相対時制として機能する場合に同時性を示せる特徴をもつ2つの時制、現在時制と過去時制の2つであると思われる。つまり、同時性を示せるということはその絶対時間領域があるということだからである。

2. 2 相対時制と順次性

相対時制的考えが1番説得的な例に次のような間接話法の例があるといえる。

- (80) a. Yesterday, Wendy said, 'I arrived yesterday.'
b. Yesterday, Wendy said that she *arrived* the day before yesterday.
c. Yesterday, Wendy said that she *had arrived* the day before

yesterday.

Comrie (1986) はこれを時制の一致論では「主節がすでに過去時制の場合、間接話法の従属節ではその時制を変えない」と「ある過去時の出来事がすでに文脈的に確立した過去より以前のことがらであれば過去完了が用いられることがある」といった2つの原理で (80b) (80c) を説明しているようであるが、その理論では (81c) の3つ目の節が過去完了になることは説明できるが、どうして (82b) の3つ目の節では過去完了にならないか説明できない。これに対し、相対時制理論では (81b) の3つ目の節が過去になれるのは2つ目の節の束縛 TO と同時性があるからと説明でき、また3つ目の節でも過去完了になりうるのはもう1つの束縛 TO でありうる主節からの束縛をうけることがあるからであると説明できる。

(81) a. I spoke to her when she came home.

b. He said he *had spoken* to her when *came/had come* home.

c. *He said he *spoke* to her when she *had come* home.

(82) a. Joan said: 'I told Betty that I *was* feeling ill.'

b. John said that he *had told* Betty that he *was* feeling/**had been* feeling ill.

また、もう1つの問題は どうして (81c) の非文性を説明するかであるが、時制の一致論にはその方法がない。これに対して相対時制論をとると、3つ目の時制は2つ目と同時性を示すために過去時制でなければならないことが説明できるとしている。

しかし、これは Comrie の説明がよくないのである。「ある過去時の出来事がすでに文脈的に確立した過去より以前のことがらであれば本来過去完了が用いられる」が第1原理なのである。(81b) (81c) の場合その原理があてはまり、2つ目の節は過去完了でなくてはならないのであるが、(81c) はこの点からして少しよくない。そして3つ目の節は2つ目の節が過去時制になっているのに第1原理に反して過去完了になっているので非文となる。(80b) がよいのは「本来過去完了が用いられる場合でも主節より前方性を示す副詞や接続詞などがあれば過去でもよい」というこれが例外的な原理で説明される。いずれにしても、この例外的原理でも (82b) は説明できないのに対し、相対時制論では問題のない文である。これが利点といえる。

また、(80b) の様な文において2つ目の過去時制の解決には、時制の一致論の立場をとるにせよ相対時制論の立場をとるにせよ、語彙に <+後方的>

とか〈-後方的〉とかいう時間素をもつかどうかを指定することが必要で、*after*、*have+p.p.* や「と」「た」は〈+後方的〉の時間素をもつといえる。よって、次の2つの文は同じ意味をもつ。

(83) a. When the train *had left*, I arrived.

b. *After* the train left, I arrived.

(84) a. 駅に着くと、電車にのりなさい

b. 駅に着いたら、電車になりなさい

これは *if* 節でも同じではないだろうか。

(85) If Mary dies, John will come into a fortune.

Declerck は (85) を順次性がなくゆるい同時性の例としているが、論理的には *if p then q* であることは 〈+後方的〉要素が強いといえ、日本語では (86) のように順次性で表せることに注意したい。

(86) a. もしメアリーが死んだら、ジョンは大金持ちになるだろう。

b. もしメアリーが死ぬと、ジョンは大金持ちになるだろう。

そこで、条件節の同時性についてももう少し考えてみよう。彼は条件節では束縛 TO との同時性をいうが、必ずしもそうとはいえない。

(87) I will see her tomorrow.

(88) If I don't see her today, I will see her tomorrow. - Sheldon, *op.cit.*

(89) If it is fine tomorrow, I will go fishing.

(87) の *will* の基点はゼロ時点であるが、(88) の基点はゼロ時点ではなく、ある未来時点との同時性で現在形が使われており、主節はその未来時点での未来時で、いわばそうなったらする動作をゼロ時点で表明している文といえる。(89) でも明日という未来時点との同時性が現在形で示され、そうなった時点からみた未来を未来時制で示している。ここにも順次性の要素があるといえる。

(90) においても「遅れることになる」と分かった未来時点において、次の動作として「電話します」ということであると思われる。

(90) If I will be late, I'll phone you.

このように考えると、条件節では束縛 TO との同時性でなく、ある未来時点との同時性ではないかと思われ、条件節には順次性があると思えるのである。

もっとも、このある未来時点を束縛 TO であるべき主節の方においてみると、それとのゆるい同時性で条件節が現在形ということになると考えてもよ

い。それが Declerck の立場といえよう。しかし、(91) のような before 節では束縛 TO との同時性でなく implicit TO との同時性をいうように、条件節でもある未来時点（あるいはまさにこの場合がにせのゼロ時点）との同時性を考えてもよいようにも思われるのである。

(91) We will attack the city before the sun has gone.

3. まとめ

相対時制は現在完了に後続する過去形の意味や、未来時に後続する過去形の意味、条件節に同時性を示す時制がくるなどという時制の一致論などでは説明しにくいことが簡単に説明できるという意味で有効な理論である。しかし、果たして彼の言うように絶対時制が4つと相対時制が4つというのでよいのかについて考え、未来時制と現在完了時制は中間的な絶対相対時制としてみた。また、条件節における同時性といっても主節との同時性には疑問が残ることも示した。さらに、語彙的には順次性を示す <+後方的> の時間素をもつ語を考えておく必要があることを示した。

4. 参考文献

- Comrie, B. 1985. *Tense*. Cambridge University Press.
 Comrie, B. 1986. 'Tense in Indirect Speech'. *Folia Linguistica* 20:265-96.
 Declerck, R. 1991a. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
 Declerck, R. 1991b. *Tense in English*. Routledge.
 Hofmann, Th.R. and T. Kageyama. 1986. *10 Voyages in the Realms of Meaning*. くろしお出版.
 衣笠忠司. 1991. 「日英語におけるテンスとアスペクト」『語法研究と英語教育』第13号. 山口書店.
 Palmer, F.R. 1988. *The English Verb*. Longman.
 Swan, M. 1980. *Practical English Usage*. Oxford University Press.